

東京春祭マラソン・コンサート vol.4

リヒャルト・シュトラウスの生涯 ～ 生誕 150 年に寄せて

第IV部 オペラ作曲家として

～《サロメ》の衝撃から、ホフマンスタールとの出会い、
最期のオペラ《カプリッチョ》まで

日時：2014年3月23日（日）17:00 開演 会場：東京文化会館 小ホール



R.シュトラウス:

歌劇《ばらの騎士》より「ワルツ」

20世紀オペラ不朽の名作と言われる《ばらの騎士》は、ホフマンスタールの台本により、1910年に完成した。18世紀ウィーンの貴族生活を舞台に、複雑な恋の駆け引きや官能に満ちた情事がオペラ・ブッフア風に生き生きと描かれている。全曲を通じて明るく華やかな雰囲気があり、それには随所で奏されるシュトラウス得意のワルツが一役買っている。特に第2幕フィナーレでオックス男爵が口ずさむワルツは秀逸である。

歌劇《サロメ》より「7つのヴェールの踊り」(ジンガー編)

歌劇《サロメ》は、オスカー・ワイルドによる1幕劇『サロメ』をもとに書かれ、1905年に完成した。「7つのヴェールの踊り」は、第4場においてサロメが踊るシーンの音楽で、独立して演奏されることも多い。ヘロデ王はサロメに、もし踊ってくれたらどんな望みでもかなえようと約束する。そして踊りきったサロメは預言者ヨカナーンの首を所望するのである。

歌劇《カプリッチョ》より「序曲」「舞曲」

1841年に完成した歌劇《カプリッチョ》は1幕13場からなる対話劇。初演の指揮を担当したのは、台本の執筆者でもあるクレメンス・クラウス。冒頭に奏される弦楽六重奏の「序曲」によって幕が開き、そのままヒロインの伯爵令嬢が耳を傾けている第1場の背景音楽となる。また、第9場において奏される「舞曲」はパスピエ、ジグ、ガヴォットという3種の舞曲から構成され、実際の舞台でも本曲に合わせて可憐な踊り手が舞う。

歌劇《ばらの騎士》より「だれも知らない」

《ばらの騎士》第1幕冒頭は、元帥夫人と一夜を過ごした甘い後朝(きぬぎぬ)のシーンから始まる。相手役の若い貴族オクタヴィアンが昨夜の感激を思い返すように夢想到に浸っている。それに対し、元帥夫人が年上の女性らしい優しさで応える、官能的な陶酔に包まれた音楽である。

歌劇《エジプトのヘレナ》より「第二の新婚初夜！ 魅惑的な夜」

ホフマンスタールの台本で第1稿は1927年に、第2稿は1933年に完成した。ギリシャ悲劇に材をとった歌劇で、トロイア戦争後のヘレナと夫メネラスが互いの愛を取り戻す過程を、魔女アイトラの使う秘薬と絡めながら描く。この曲は第2幕冒頭でヘレナが歌う喜びのアリアである。

歌劇《ナクソス島のアリアドネ》より「偉大なる王女様」

元来はモリエールの戯曲『町人貴族』の劇中劇として1911年に書かれたものが、改作を経て1916年に現在の形で初演された。オペラの始まる前の舞台裏を描く「序幕」、そして「オペラ」からなるが、この曲は「オペラ」のなかで、ナクソス島に置き去りにされたアリアドネを慰めるべく、ツェルビネッタが歌う軽やかなアリアである。